

夕方空の下で

奨励	大澤 香【おおざわ・かおり】
奨励者紹介	日本キリスト教団洛西教会副牧師 同志社大学神学研究所生

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六ツスタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけにご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

一行は目指す村に近づいたが、イエスはおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

(ルカによる福音書 24章13-35節)

夕方のマジックアワー

秋になりました。「春はあけぼの。・・・秋は夕暮れ」と言いますので、秋は月だけでなく、夕暮れも美しい季節のようです。

少し前に、実家のある四国に帰省していたのですが、一日の終わりにふと、「夕日が見たい」と思い、埃をかぶっていた自転車を出して出かけました。家から30分ぐらいで「しまなみ海道」なのですが、橋の上から夕日を見ようと思ったのです。橋の袂まで来たころには、辺りは大分薄暗くなり、もう日没が間近でした。橋はもう、すぐ目の前なのですが、螺旋状に橋までの坂道を上っている間にごんごん日が落ちてしまい、「ああ、日没に間に合わない。夕日が見られない」と焦りました。橋の上に出た時には、太陽はもう水平線の下に沈んでしまっていました。「ああ、間に合わなかった・・・」と思いながら、橋の上から海の方を見渡したのですが、そこで思わず息をのみました。太陽はもう沈んでしまったのに、空が、赤、オレンジ、薄いピンク・・・何とも言えない美しい色にサーッと染まっていて、空の色を海が映し、そのなかにしまなみの島々のシルエットが映し出され、海の上を一艘の船が進んでいました。見ているわたしの心の中にまで流れ込んで来るような景色で、思わず「カシャリ」と心のシャッターを切ったのです。後から知ったのですが、この時間帯を撮影の専門用語では「マジックアワー」と言うのだそうです。日没の直後、太陽が存在しなくなった数十分の間、影が限りなく無い状態となって、一日のなかで自然の風景が最も美しく映し出される時間、なのだそうです。

今年の4月から、日本キリスト教団洛西教会の副牧師をさせていただきながら、神学研究科で研究をしております。カメのように歩みの遅いわたしには、やらなければならない課題が一杯あり、正直なところ余裕があるとはとても言えない状態なのですが、自分自身を顧みて思います。自分の心が一杯一杯になっていると思うことや、肩や頭がカチコチになっているなど思うことがあります。そんな日々なかで、この火曜日の夕方のチャペル・アワーは、一週間に一度、このひとときの時間、クラーク記念館の螺旋階段を上り、そっとこの礼拝堂に足を踏み入れ、後ろの方の席に座って、パイプオルガンの音に癒され、聖歌隊の賛美の声に心洗われて、メッセージに身を委ねて、言うならば、「温泉」に浸かったように身も心もほぐされて、重くなっていた心をやわらかくしてもらって、またそっと帰ってゆく、わたしにとって、そんなかけがえのない癒しの時間です。

今日のルカによる福音書の箇所は、イエスが復活された日の出来事として記された物語で、二人の弟子が、エルサレムからエマオという村へ歩いてるところから場面が始まります。エマオという地名は古くから「温泉」という意味と考えられてきましたので、この二人も、疲れた心と体がほぐされることを求めて、「温泉」を目指して歩いていたのだろうか・・・、というのは冗談ですけれども、でもやっぱりこの時の彼らの心というのは一杯一杯でがんじがらめにされていて、重たい足取りであったことだろうと思います。そんな彼らの隣を、いつしか、イエスが一緒に歩き始めるという場面です。

鯛焼きの温かさ

つい昨日の夕方のことなのですが、恩師である先生が、京都教区の教会に来られるということを知って、わたしも授業が終わった後に参加させていただきました。大学1年生から4年生まで通った教会の牧師で、洗礼も授けていただいた恩師です。わたしは今でも未熟な者ですが、その当時はもっと未熟で、心がつまづくことが多くありました。教会に行っても、上手く笑うことができなくなっていた時期がありました。一生懸命平静を装いながらも、心の中は一杯になっていたわたしに、ある日その先生は、「香ちゃん、落語に行こうよ」と言われたのです。なんで落語なのか、理由は分からないままについて行ったのですが、そこで観たのは、涙あり、笑いありの傑作の高座でした。復活したイエスは焼いた魚をムシヤムシヤ食べられたけれど、その時わたしの手にあったのは、魚は魚でも、あんこの入った「鯛焼き」でした。わたしはその鯛焼きを食べながら、素晴らしい話芸を聴いて、お腹の底から笑ったのです。アツアツの鯛焼きが喉を通ってお腹の中に入り、わたしは心の底から笑っていたのです。最後まで理由は言われなかったけれど、どうして先生が落語に行こうと言ってくださったのか、分かったような気がしました。帰る時、わたしの心はポカポカとあたたかく、お腹の底から力が湧いてくるのを感じていましたから・・・。

昨日の夕方、その先生を囲んで京都教区の先生方と楽しい食事の時間を過ごしながら、お世話になったその当時のことを思い出していました。

軽やかに

心を一杯にして、重い足取りでエマオに向かっていた弟子たち。彼らの重く不安な足取りと、彼らが踏みしめていた地面。その隣を、イエスの足取りが重ねられます。弟子たちが踏みしめている重たい地面の上を、イエスも確かに一緒に歩かれながら、しかしイエスの足は同時に、彼らとは全く違う次元の地面をも踏みしめているのだ、ということも思います。彼らの隣で同じ地面の上を歩かれながら、イエスの足取りは、どこまでも「軽やか」なのです。弟子たちの目は遮られ、隣にイエスがいることにすら気がつきません。悲しくなるほど、物分かりの悪い、歩みが遅い、弟子の姿。その弟子の横を、嘆きつつも、彼らの「先生」であるイエスが、一緒に歩いてくださっている、そんな場面です。

目が縛られてイエスのことが分からず、分がりの悪い弟子たちは、しかしイエスの足取りに伴われて、その足取りに自分の歩調を合わせながら、一步一步歩いてゆく。きっと始めは次元が違い滑稽なほどに食い違っていた会話も、語りかけられるイエスの言葉を聴きながら歩いていく。隣にいるイエスの気配、神様という土台をしっかりと踏みしめてどこまでも軽やかなイエスの存在を、全身で感じながら一緒に歩いてゆくうちに、いつしか彼らのがんじがらめだった心と目は、その縛りから少しずつ解かれてゆき、軽やかにされて、そしていつしか弟子たちの足も、一步一步、イエスが踏みしめている地面の上を、踏みしめながら歩いてたのかもしれない。

日がだんだんと傾き、時間帯は夕方になってゆきます。日没が近づき、辺りが薄暗くなり、自分の感覚がもはや頼りとはならない、そのような時間帯です。心と目を少しずつ解きほぐされた弟子たちは、「わたしたちと一緒に泊まってください」とイエスに頼み、イエスは家の中へと入ってこられます。そしてその場所で、いつものとおり、パンを裂いて彼らに与えられたイエスの姿を、彼らは「見る」ことができました。自分にできることを、自分を割いて、その時その時、大切にしてゆく。弟子たちは解かれた心で、イエスの姿を見ました。この後、イエスは目には見えなくなりますが、イエスと出会った二人は、夕方空の下をもう一度エルサレムへと帰ってゆきます。「イエスは生きておられる」。地平線の下の、この物語の中心にある「言葉」が、物語全体を照らして包んでいます。イエスの生命があふれている、そんな空の下を、弟子たちはこれから先も歩いてゆくのです。